富山市科学博物館
TOYAMA SCIENCE MUSEUM

富山市科学博物館の友の会運営について

著者	田中 豊
雑誌名	富山市科学博物館研究報告
号	35
ページ	137-140
発行年	2012-03-10
URL	http://repo.tsm.toyama.toyama.jp/?action=repository_uri&item_id=953

富山市科学博物館研究報告第35号，pp. 137－140；(2012)

資　料

富山市科学博物館の友の会運営について

田中　豊

富山市科学博物館
〒939-8084 富山市西中野町1-8-31

An anecdotal report: Museum Friendship management in the case of Toyama Science Museum

Yutaka Tanaka

Toyama Science Museum
1-8-31 Nishinakano-machi, Toyama-city,
Toyama 939-8084, Japan

はじめに

昨今の経済不況は博物館運営にも影響をおよぼし、予算削減などによる事業縮小を余儀なくされている。このような状況のなかで「博物館友の会」が教育普及活動に積極的に関わって博物館を支援し、更には新たな教育活動を自主的に展開する事例も見られるようになった。例えば、年間25回以上の講座を開催している神奈川県立生命の星・地球博物館友の会はその好例と言える（田中 2008)。このように現在友の会の活動は、多様な博物館活動を生み出す原動力として注目を集めるに至っている。

一方、友の会の運営に目を移すと、大阪市立自然史博物館のように友の会から発展したNPO法人が組織・財政の確固たる基盤を得て、博物館と対等かつ相互を補完する充実した活動を行っている事例がある（山西 2003)。しかしその反面、全国には組織運営（例えば財政や会員の獲得など）に苦慮している友の会も存在する。このような運営上の課題解決には事例研究が不可欠であるが、友の会の運営に着目した報告は数少ない。

そこで本稿では、設立から4年が経過した「富山市科学博物館友の会」（以下、科学博物館友の会）の運営について報告するものである。設立経緯、会員構成、科学博物館友の会の創設期に生じた問題を中心に述べる。

■設立経緯

「富山市科学博物館」は1979年（昭和54年）に「富山市科学文化センター」として開館した。郷土の自然に立脚した博物館であり、自然系部門のみならず理工系部門も含めた総合的科学博物館である。

2006年～2007年（平成18年～19年）にかけて建屋のリニューアル工事および全館の常設展示更新が行われ、これを機に「富山市科学博物館」と名称を変更し、2007年7月13日にリニューアルオープンを果たした。

科学博物館友の会は、生まれ変わった博物館のより一層の活用と生涯学習の充実を目的に設立された。第1回設立準備委員会の資料には、設立目的について次のように書かれている。

「(科学博物館友の会は）新博物館の展示資料や人的資源の積極的な活用を図るため、広く市民・事業者の協力を募り、青少年を始め市民への科学・自然への興味関心を高め、普及教育（生涯学習）の興隆を図る（ことを設立の目的とする)。」

また、新博物館のミュージアムショップ運営の受け皿としての意義も大きく、特別会計を設置して友の会設立当初からショップ運営を行っている。

■会員構成

会員区分は、一般会員、家族会員、賛助会員からなる。2011年10月末日現在の会員数、年会費などを表1にまとめる。また一般会員の年齢構成を図1に、家族会員の年齢構成を図2に示す。

図1から分かるように一般会員は30代～40代が多い。この世代の一般会員が登録している家族会員の多くは、同年代の配偶者および12歳以下の子どもであり、これは図2の数値にも現れている。また一般会員には60代の会員も多い。以上から、科学博物館友の会の主要会員は、小学生以下の子どもを持つ家族であり、次いで60歳以上の個人とその家族であることが分かる。

区分	要件	会員数	年会費
一般会員	個人が入会できる。	127人	1000円
家族会員	一般会員と同居する家族が登録できる。	273人	無料
賛助会員	団体・個人が入会できる。	9件	10000円（１口）

表1　富山市科学博物館友の会の会員区分
（会員数は2011年10月末日現在）

＊富山市科学博物館研究業績第436号

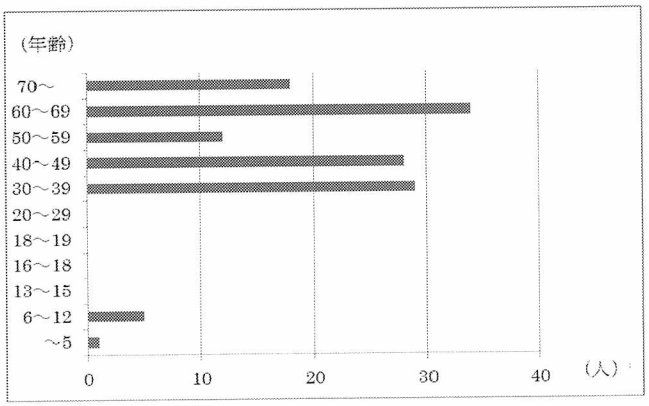


図1　一般会員の年齢構成（N＝127）

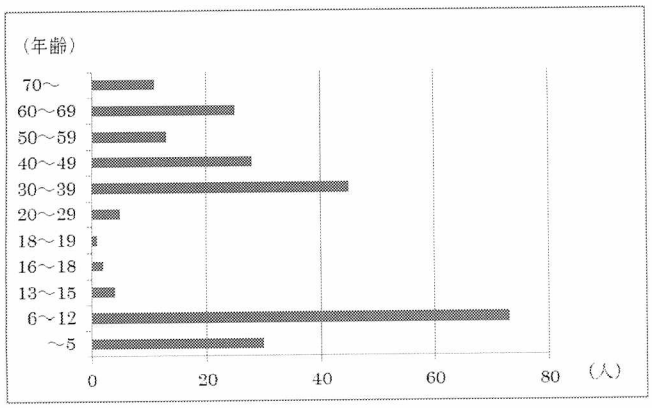


図2　家族会員の年齢構成（N＝273）

■創設期に生じた問題

科学博物館友の会は未だ発展途上の組織であり、運営面での課題は山積しているが、ここでは「友の会の位置づけ」と「入館特典に関する問題」を取り上げる。この2つの問題は、科学博物館友の会の創設期に生じた主要課題であり、この課題を解決する過程で友の会の運営方針が確立されてきたという経緯がある。

【友の会の位置づけ】

科学博物館友の会は「博物館の資源をより積極的に利用してもらいたい」という思いから設立されたものであるが、活動の方向性を定めるまでには少々時間を要した。というのも、当館には以前から類似の目的を持って活動していた「ボランティア組織」があったからである。

1989年（平成元年）、旧富山市が市政100周年を機に「生涯学習都市」を宣言したことを受け、当時の科学文化センターでも博物館資源を利用した市民の自己啓発促進の場として、ボランティア制度を発足させた。

ボランティアは初年度に59名の登録があり、以後多少の増減はあるものの、登録者は徐々に増加していった。展示解説、イベント・資料整理補助などがボランティア組織の主な活動であったが、程なくして退職教員など高度な知識を有する人材を中心に、「実験パフォーマンス」「カメラマン養成講座」などと銘打った活動が自主的に実施されるようになり、加えて資料整理活動から発展して、より深い科学的知識・技能の習得を目的とするグループも結成された。また大型連休や夏休みなどには、ボランティア組織主導でイベントが開催されるなど、博物館に無くてはならない存在として成長していった。

このように科学博物館友の会設立時には、ボランティアの域を超え、博物館という資源を積極的に活用している組織が既に存在していた。博物館が類似した目的を掲げる友の会を立ち上げることは、「ボランティア組織が廃止されるのではないか」という危機感をボランティア登録者に与えることになった。これまで科学博物館を積極的に支援してくれていた市民から、友の会設置について理解を得にくい状況に陥ったのである。博物館側としては、ボランティア登録者が友の会の主要メンバーになってくれると期待していた面もあり、このことは職員に少なからず動揺と混乱を生じさせた。

リニューアルオープンを控えた繁忙期だったとはいえ、友の会設立を打ち出した時点で、職員間で「ボランティア」と「友の会」の役割についての十分な議論がなされていなかったこと、またボランティア登録者や市民に対して十分な説明が出来ていなかったことは反省すべき点である。

この問題を克服するため、博物館における「ボランティア」と「友の会」の位置づけについて、職員間で議論を深化させた。その結果、成熟したボランティア組織の活動を維持しつつ、友の会は新たな学習機会を提供する組織として運営することとなった。友の会役員会においても議論され、当面は今まで博物館で実施することが困難であったバスを使用しての県外での自然観察会・博物館見学会が活動の中心となった。

このように友の会の方向性が定まると、当初友の会への入会に消極的であったボランティア登録者からも、多数の入会者が見られるようになった。

【入館特典の問題】

多くの友の会では、会員に対して入館特典を付与している。友の会会員は会員である限り、その博物館に無料入館できる場合が多い。入館特典は市民が友の会入会に魅力を感じる大きな要素でもある。

しかし運営の面から見ると、特に公立博物館においては、任意団体の友の会が入館料の免除、あるいは減額の許可を受けることに問題が生じる場合もある。それぞれの博物館で取り扱い方も異なり、館長の裁量で入館料免

除の決定が得られるケースもあれば、友の会の会費から会員の入館料を納めているケースなどもある。科学博物館友の会は後者の方法をとっているが、このことで問題が生じた。

科学博物館友の会では設立当初、年会費を2000円に設定し、会員に無料入館特典を付与していた。この無料入館特典は、年会費のうち1000円を通年入館券（通常価格1500円）の割引購入に充てることによって成り立っていた（つまり、年会費2000円の内訳は、1000円が科学博物館通年入館券の購入費、残りの1000円が会の運営費となっていた）。

通年入館券を購入する市民は、いわば科学博物館のヘビーユーザーである。通年入館券の購入価格にプラス500円で様々な特典（会報などによる充実した博物館情報の提供、友の会主催イベントへの参加、ミュージアムショップでの割引購入）を得られることは、購入者にとって少なからず魅力となったようであり、初年度は一般会員86件の入会があった。

しかし設立2年目（2008年）に、富山市博物館等共通観覧券（以下、年間共通パスポート）」が発売された。年間共通パスポートは1000円で購入でき、科学博物館のみならず、市内の動物園・美術館など指定された13施設に1年間何度でも入館できる観覧券である。（当初は富山市民限定で発売されていたが、2010年10月には居住地に関係なく、誰でも購入できるように拡充された。）

年間共通パスポートの登場により、科学博物館友の会への入会件数は大きく減った。設立初年度の一般会員の新規入会は86件だったのに対し、2年目の新規入会はわずか9件のみである。継続更新の件数も少なく、科学博物館友の会の会員数（一般会員）は一時53名にまで落ち込んだ（表2）。

また、年間共通パスポートの登場により、科学博物館の通年入館券は廃止されることとなり、会員に対する無料入館特典の付与も出来なくなった。

この問題に対処するため、まず年会費の引き下げを行った。通年入館券の購入に充てていた1000円分を年会費から取り除き、無料入館特典を廃止した（その代わり、会員は団体割引料金で入館できる特典、夏の特別展（通常観覧料200円）を1回無料観覧できる特典を新たに付与）。結果、友の会に入会することによって得られる入館特典の魅力は半減したが、年会費が1000円になって入会に際しての金銭的負担が減ったことは、入会促進に一定の効果があったと思われる。

また年間共通パスポートの発売によって入会者数が激減したことは、多くの市民にとって、入会動機が入館特典にあったことを暗示している。そこで友の会主催イベントの企画を見直し、より魅力あるイベントに参加できることを友の会の入会動機として位置づけられるよう改善に努めた。

2009年度（平成21年度）には子どもたちに人気のある「恐竜」を一つのテーマとして年間の行事計画を策定した。富山では恐竜化石が産出し、当館でも毎年夏季に集中的な発掘作業を行っている。この「恐竜」という当館の資源を活用して、発掘現場の見学と化石発掘体験、福井恐竜博物館へのバスツアーなどを実施、また会報などの出版物にも恐竜に関する情報を積極的に取り上げた。

2010年度（平成22年度）には富山県民の誇りともいえる「立山」「富山湾」という自然に注目して、学芸員と科学的な視点から地域の自然をより理解し、楽しめるような行事を計画した。学芸員と歩く立山での自然観察会もさることながら、氷見市で開催した地曳網は大変な注目を得て、これらの行事を目当てに新規入会する事例もみられた。

このように科学博物館特有の資源を活用し魅力的な行事を企画することによって、市民の間に友の会に対する関心が高まり、会員数や行事への参加人数は増加に転じた（表2）。

年	一般会員数	行事参加者のべ人数(行事数)
2007年	86人	40人（13回）
2008年	53人	70人（７回）
2009年	111人	192人（９回）
2010年	126人	239人（８回）

表2　科学博物館友の会一般会員数と行事参加者数の推移

おわりに

富山県の人口は109万人余り（2011年9月現在）、この数は東京や大阪などの大都市圏の人口の1～2割ほどであり全国的に見ても多いとは言えない。このことは全国の都市部にある博物館と比較しても、博物館利用者数は（潜在的利用者も含めて）決して多くないことを示している。また富山県は「自然解説員（ナチュラリスト）制度」（富山県が運営）、県内博物館園の友の会などが早くから整備されており、県民が自然に親しみ、より深く学習する場が整備・充実している。富山県は豊かな自然環境を背景に、県民の自然に対する関心も高く、多くの県民がこれらの組織に所属し、活動・学習を行ってきた。

このような状況のなかで、科学博物館が後発して友の会を設立し、会員を得て、組織を運営していくことは容易なことではない。科学博物館の資源や特性、また市民からの期待を再吟味し、それらをいかに企画・運営に反映できるかが友の会存続の鍵となるであろう。

博物館における友の会運営は、本来、博物館とは切り離された形で、すなわち自主自立して行われることが望ましい。そうすることによって活動に自由度が生まれ、多様な学習機会を提供することが可能になり、更には博物館を活性化する原動力となる。しかし科学博物館友の会の場合、博物館が主導して設立した組織であり、組織として独り立ちするにはまだまだ時間と労力をかける必要があると言える。

現在のところ、友の会の運営のほとんどを館が担い、運営事務は主に学芸課の職員2名が担当している。また誤解を恐れずに言えば、友の会に対して職員の中に温度差があることも否めない。しかし友の会を自立した組織に育てるには、すべての職員が熱意をもって会員と接し、積極的に活動に関わっていくことが肝要といえる。「友の会」という言葉が示すとおりその運営の礎となるのは、結局のところ職員と会員との、また会員相互の親密なつながりによるところが大きいからである。

職員と会員が同じ場に集って働き、知識と技術の習得・向上を図るとともに、自分の持つ知識を教え、共に学ぶことの喜びを味わう経験が、会員個人の積極性を育み、友の会の自主自立の運営を可能にするように思われる。

謝辞

本報告の執筆にあたっては、平成23年度笹川科学研究助成を受け調査を行った資料を参考にした（研究番号23-825）。助成に対し、この場を借りてお礼申し上げる。

参考文献

田中徳久 2008.「友の会が求めることと友の会に求めること」全科協ニュース vol.38, No.4, 全国科学博物館協議会.

山西良平 2003.「ミュージアム連携事業のNPO法人化で博物館力の更なる向上を図る」 Cultivate vol.20, 文化環境研究所.

（参考資料）

2009年度（平成21年度）の主な活動

イベント名称	参加人数	内容など
友の会の日（2回開催） 「新プラネタリウム内覧会」 「友の会スペシャルデー」	のべ63人	「新プラネタリウム内覧会」では、リニューアルしたプラネタリウムの一般公開に先立ち、会員のための試写会を開催（4月に開催）。また「友の会スペシャルデー」は、夏の特別展初日に会員向けの展示解説会や工作教室、特別展のテーマ「北海道の自然」に関連させて北海道の特産品の試食会を行った。特に試食会は好評。
「恐竜ミステリーツアー」	33人	「恐竜ミステリーツアー」は、バスを使用しての見学会。現在も発掘が行われている恐竜化石発掘現場の見学と化石採集体験を行った。博物館でも同様の行事を行っているが、友の会では年齢制限を下げて実施。「化石を調べよう」はミステリーツアーのフォローアップ行事として実施。化石発掘体験で採集した化石をクリーニング・同定し、標本に仕上げた。
「化石を調べよう」	8人	
恐竜に会いに行こう！	38人	バスを使用しての見学会。福井県立恐竜博物館を見学した。学芸員の方に展示解説をしていただき、化石発掘体験なども行った。
神通峡で紅葉を楽しもう！	19人	バスを使用しての観察会。身近な自然を楽しむことを目的に富山市内の神通峡で開催したが、観察地が近場すぎて、参加者数が伸びなかった感がある。

これらの他、工作教室なども実施した。会報は８回発行。

2010年度（平成22年度）の主な活動

イベント名称	参加人数	内容など
友の会スペシャルデー	27人	夏の特別展に合わせて、前年度に引き続き開催。2011年度にも実施され、友の会の定番行事として定着しつつある。この年の内容は、展示解説と夏休みの自由研究にも役立つ化学実験教室。
春の親見湿原と姫川源流を訪ねて	34人	バスを使用しての自然観察会。比較的会員数の多い60代～の世代をターゲットに企画。前年度に開催した神通峡での自然観察会は観察地が近すぎて不評だったという反省から、長野県の親見湿原周辺を目的地とした。スタッフを含めると、大型バス1台がほぼ満員となる盛況をみた。
フォッサマグナ糸魚川体験！	33人	中型バス2台を使用した自然観察会。2009年に糸魚川地域が「世界ジオパーク」に認定されたこともあり会員の関心も高かった。この機をとらえ、観察会を実施した。フォッサマグナパークや小滝ヒスイ峡などで観察会を行った。
プロが案内する立山の魅力	32人	バスを使用しての自然観察会。紅葉の時期を迎えた立山での観察会を企画したが、雨のなかでの実施となった。天候には恵まれなかったものの、企画に対する会員の関心の高さがうかがえた。
海の味覚をサイエンス 「わくわく地引き網体験！」	55人	氷見市島尾海岸で地引き網を行い、富山湾の海洋生物についての学習会を実施した。現地集合・解散とすることで、バスでの観察会と違い、定員を設定せずに済んだ。観察の後は海鮮鍋での昼食会も開催し、大変好評であった。

この他、館主催の科学教室などで人気のあった「貝化石を調査せよ」（貝化石のクリーニング、15人参加）、「ピカピカ泥だんごをつくっちゃおう」（27人参加）などを友の会会員の為に実施。「しんじ先生の実験教室　あなたの知らない輪ゴムの世界」（16人参加）などの実験教室なども好評を得た。会報は10回発行。